

大隈言道自筆資料 『自詠集中抄』

——言道門下小林重治歌集—— (一)

進藤康子

前回に続き、江戸時代後期に活躍した福岡の歌人、大隈言道の自筆新資料を紹介する。

言道門下の小林重治の歌集『自詠集中抄』は、飯塚歌壇の当時のおもかげや、門下生同士の歌集の貸し借りの様子も詞書などから看取できる。また、この歌集を添削および清書した、師言道の指導方針をかいまみることはもとより、のびやかな言道の筆の跡をも辿ることができる好資料であり、この和本全体が、鑑賞に堪えうる芸術作品である。前号の続編として翻刻し、言道の門下指導の一資料として考察していきたい。翻刻に於ける凡例は、前号参照のこと。

67. みそきするしてのしらゆふ打そよき
あきをまねきてかは風そぶく
68. 後のよのひとひく／＼にちかくなる
かねの音にもおとろかすして
69. 今そひもときそめにける小萩はら
野かひのうしはおひなはなちそ
70. いりひさすこす糸にあらしふきぬれは
何にまとふ夕からすかな 「(9・ウ)
71. 冬かれのさひしきみねのひとつ松
をり／＼くものかゝる計を
72. なかゝきにおふる夏木のしけり相て
となりをうとくなせるころかな
73. 故郷のあさちはらになくむしの
かはらぬこ糸に昔をそおもふ
- うしのむれて川をわたるを見る

74. ゆきのしまゝきの子うしの群道も「(10・オ)
野川さをとりわたるなるかな
75. たちこめてそこもわかぬ霧のうち
とりなくかたや家路なるらん
76. あけぬればほふ朝日にさきたちて
まつ立のほる山の秋霧
77. おとたへるをきのうはゝの夕風に
しかのなくねをそへてきくかな
78. としをへてくつるゝ軒のいたひさし「(10・ウ)
人の身ほともなくて折けり
79. あさ夕にづることをのみおもひつゝ
わかよをつくす市のいへのうき
80. つねはたゝひとつたかねと見えにしも
ゆきふりわくるをちのやへ山
81. てる月のかつらのさとのおひのやと
くもぬにねたるこゝちこそすれ
82. いかばかり寒からましを冬夜の「(11・オ)
あらしのうちにすめる月影
83. みやこへにみつきはこふとさわくこそ
しつけき御世のしるしなりけれ
84. わかれちは君のとりはくつるき太刀
身をきりておくこゝちこそすれ
- うらのしほかひてふつたの集を
ともよりかしてよといひやり
ければよみそへてつかはしける「(11・ウ)
85. さきたてる君にしほかひゝろはれて
冬のうなひをおくれてそゆく
86. をみなをもいむとふてらのいけのうへに
何故をしのつかひすむらん
87. いけのうへにすむみつとりもあるはつき
あるはしつみてよをわたるなり
88. あとつくる人いとひてやしらゆきの
さよふけてのみふりつもるらん「(12・オ)

89 とふ人もなき山さとのゆきのひは

ほたひのなかにほともなかりけり

90 てるをまつ人のこゝろにひきかへて

としのはつるをくゆるすみかま

91 なそもかくはしきる計としのをの

ことしはつきてみしのこゝろらん

92 はるかすみ立のくせともうくひすの

こゑはかくれすきこえけるかな」(12・ウ)

93 うくひすのなくねにうめの花までも

うれしときげやゑみさかにぬる

94 けさはまたてるのあらしのさむきかな

冬やいつこにのこりあつらむ

大石良夫

95 うかれめのひさの枕もそらゑひも

ちゝにおもひはやましなのさと」(13・オ)

96 わきもこかそてひかせしとおもふ身に

なと人つまのかくはこひしき

97 かすならぬ身にもゆくすゑとやせまし

かくやせましの望ありける

98 かすくにものおもふこともゑひぬれば

さけてふなをほうへおほせけり

わかれのうた

99 をりくは道の並樹の花を見て

おもひも」(13・ウ)

いてよわかまつとたに

100 なによりもおくられにけるわかれこそ

たひゆくおのおもになりけれ

101 こゝさすかたもなけれとくもをたに

はなとも見むといてしけふかな

102 さくらはないつさかましときのみまて

おほくの人をまたせつるかな

- 103 はなさかり雨もあらしもなきひ暮 (14・オ)
 わかこゝろのみもてさわきゝけれ
- 104 まきあくるをすのうちにも花ぢれは
 にくゝもあらぬ今朝の山風
- 105 えたさしてそのゝ竹のこしける也
 ことしの夏のかげにこそせめ
- 106 をちこちにおほくはあれとむらやまの
 おなしすかたのみねたにもなし (14・ウ)
- 107 ほとゝきす雨ふりならなくこゑに
 まちし心ははれにけるかな
はるゝたくれ
- 108 とみくさといふなにめてゝこゑたれと
 さるしるしなきやとそはかなき
- ある人竹のよみなかきを
 きせるのさをかしてとおくりけるに
- 109 うきふしもなきこの竹に身をなして
 わかよもかなとおもひける哉 (15・オ)
- 110 さみたれに小田の畝こすみつのうちに
 なかれしとてやかはつなくらん
- 111 あせこゆる水におとのみのこしつゝ
 さ月の雨ははれにけるかも
- 112 こをもたてさひしきやとはなてしこの
 花よりなこそゆかしかりけれ
- 113 夏竹のしけれる下やなかるらむ
 野中のしみつ音はかりして (15・ウ)
- 114 さよ中にわかやのかとをはやたちの
 こまやすくらんすゝのきこゆる
- 115 むまやちのかりの枕の夢のうちも
 たゝめこともこのとはかりして
- 116 花のはる月の秋とてたのしめは
 うき風とくもなきよならなん
- 117 わかやとはをむき大麥からたきて
 かやりに夏のをあかす也 (16・オ)

- 118 なたよゆくわれよりさきにおとろきて
さわたるへひのくさかくれつゝ
- 119 六月の日にたにぬかぬみのむしは
夕立雨のまたもふるかと
- 120 市中にすめはまつふくかせたにも
松にきゝつゝおもしるきかな
- 121 いくたひもはらひのくれとやかてまた
わかひさにしもあからかひねこ」(16・ウ)
- 122 みたれたるむかしおもへはせきのとに
いりし夕日のかけあはれなり
- 121 こよひこそあつさもしらすふねうけて
うきよの 夏の 外にてにけり
- 122 おろかなるわか身のほとをかきぬれば
筆のこゝろにはつかしきかな
- 123 あさなく川のおさせにうつきりの
立もとまらずなけれける哉」(17・オ)
- 124 いるにてゝ糸ひつゝたてるをみなへし
何所のたれになひくすかたそ
- 125 あきことにきなれをりせはかりかねも
くもちのきりに道まよはまし
- 126 みちのへにふみひしかれしはき迄も
あきは秋とて花さきにけり
- 127 うらやまし秋の夕のさひしさも
しらてしほめる舞花」(17・ウ)
- 128 わかむねのうちのこたちはしけれとも
ひまもとめつゝ月を見るかな
- 129 あまりにもてる月かけのあり明に
さしわすれやとさゝぬまとかな
- 130 一人見るこゝろはくものうへまでも
かよふか月のこゝにさやけき
- 131 くれたけのひとよくにかけまして
はこしの月のおもしろき哉」(18・オ)

132 うるし川へを行はゆく水の
おもにみちたるありあけの月

133 わたつみのうしほもにはにみちかほに
てらせる月のかけをみるかな

134 くれもあへすそらにのほれる長月の
今夜も月におくれてそみる

135 うらゝなるはるひとゝもに伸にけり
たゝひとすちのうめのたちえは」(18・ウ)

(つづく)